

第6章 モンゴルの経済発展と北東アジア協力

エンクバヤル・シャグダル

構成

1. はじめに
2. 経済体制移行に伴う経済諸改革とモンゴル経済の構造
3. 経済体制移行とモンゴル経済の発展 (1990-2016)
4. 北東アジア経済協力と将来的な潜在力
5. 終わりに

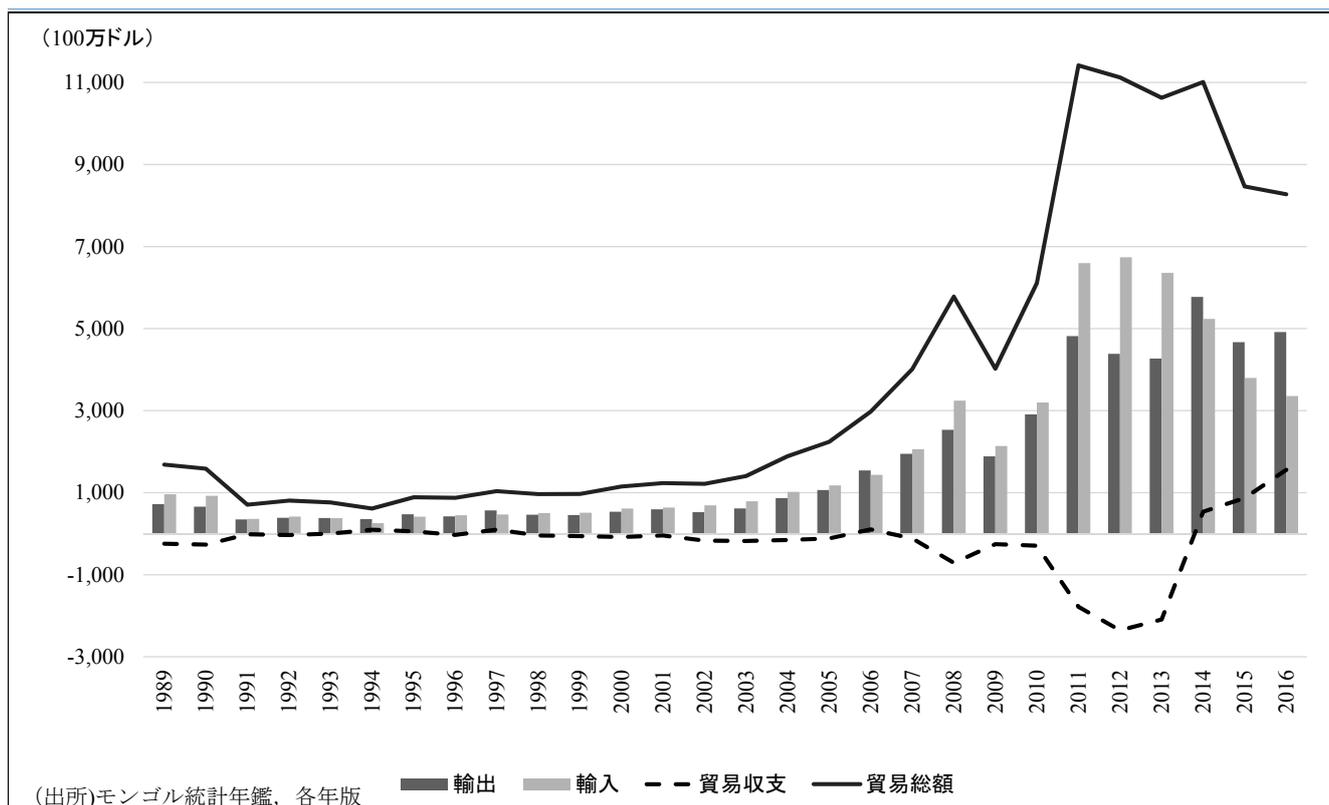
1. はじめに

- モンゴルは中央計画経済から市場経済への転換を最も急速に進めた国のひとつ。
- 移行にあたって、新自由主義的なショック療法政策が採用された。
- しかし、こうした政策が、しばしば望ましくない結果につながった。
 - 当初の経済の縮小と低い経済成長 (1990-2000の失われた10年)
 - 新たな社会問題の発生 (失業、貧困、所得格差)
- 1990年代初頭に製造業が崩壊した後、鉱業が主力産業となった。
- 近年のモンゴルの経済発展(好・不景気)は、国際市場での主要鉱物資源に対する需要・価格の変動に左右されてきた。

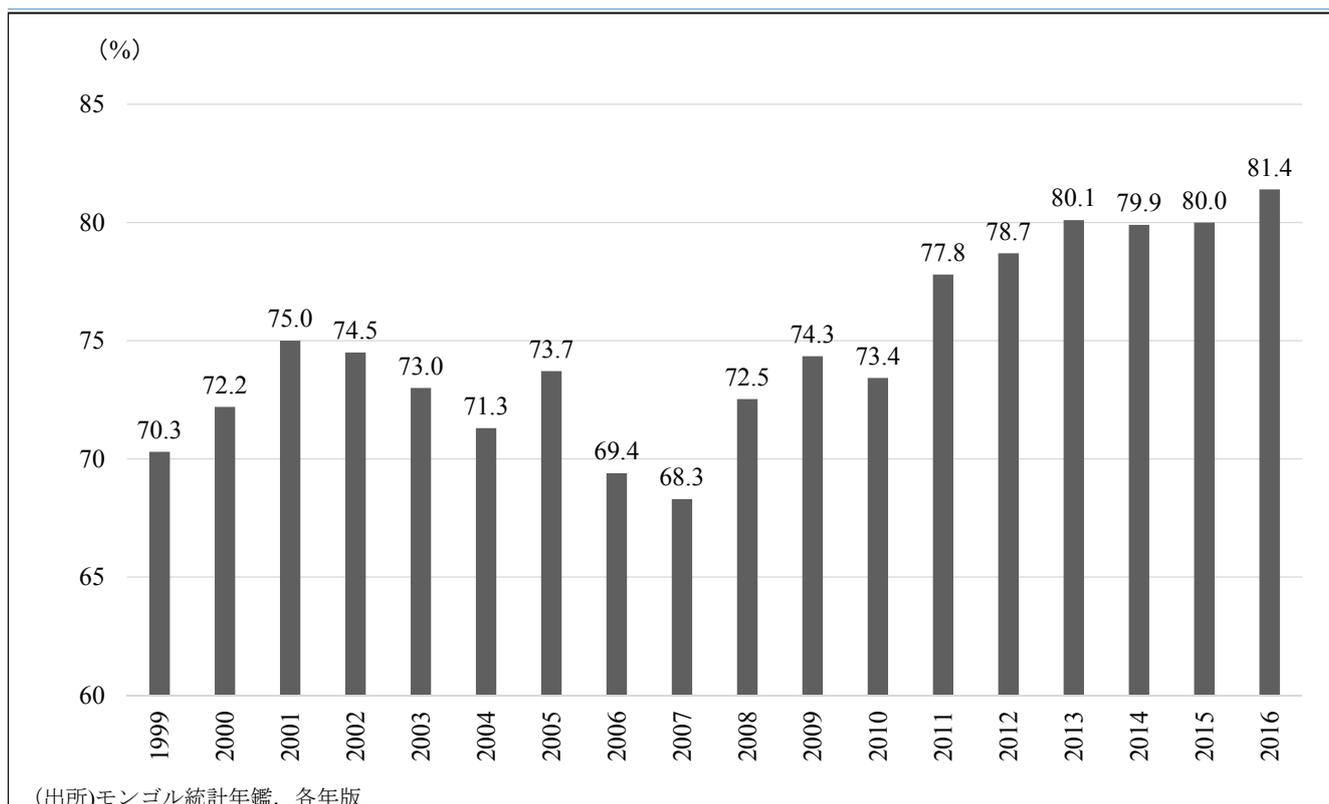
2. 経済体制移行に伴う諸改革

- 2.1 価格自由化とインフレ
- 2.2 貿易自由化
- 2.3 民営化
- 2.4 金融の自由化と銀行部門の発展

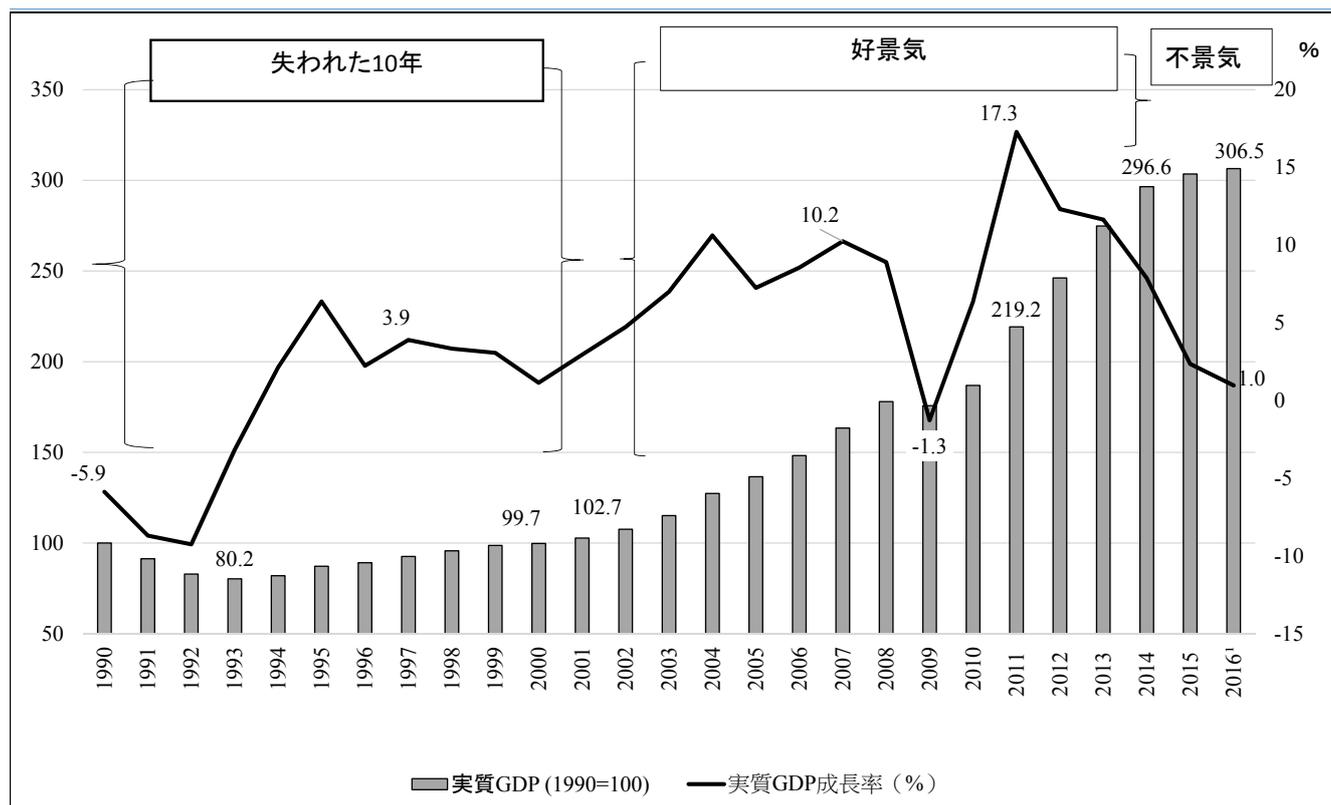
対外貿易の推移(1989-2016年)



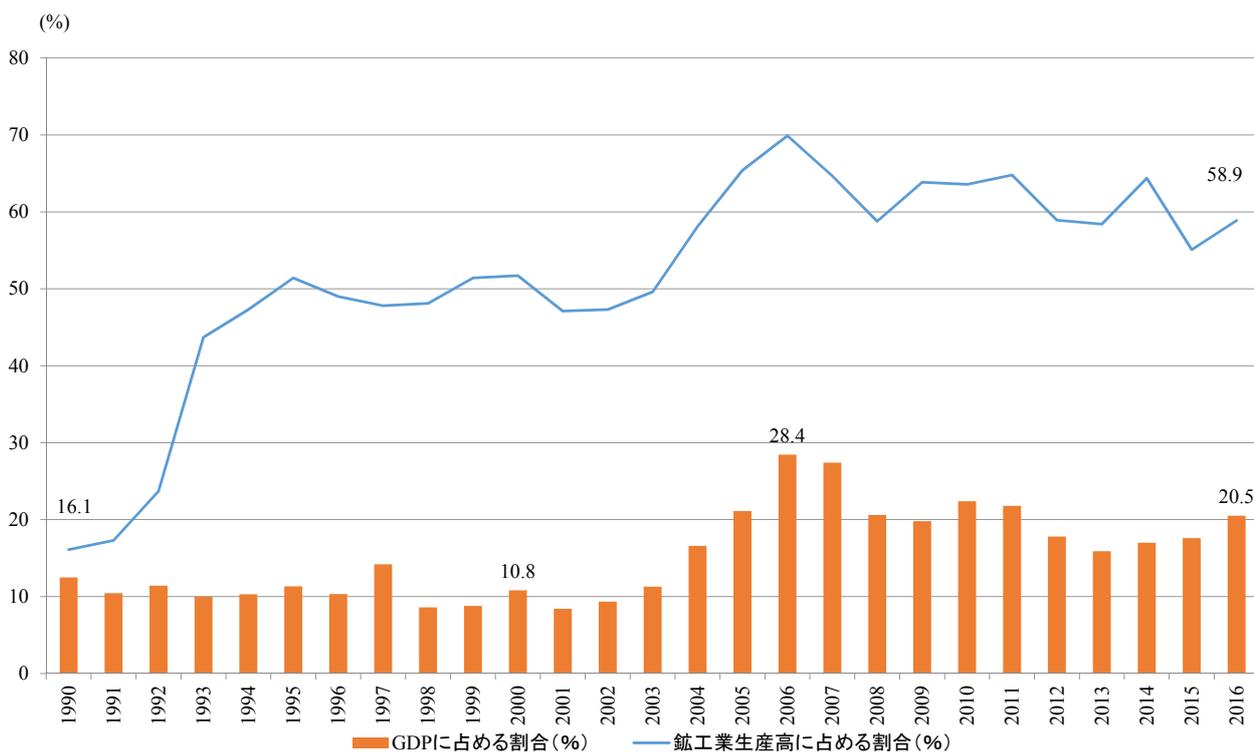
GDPに占める民間部門の割合(1999~2016年)



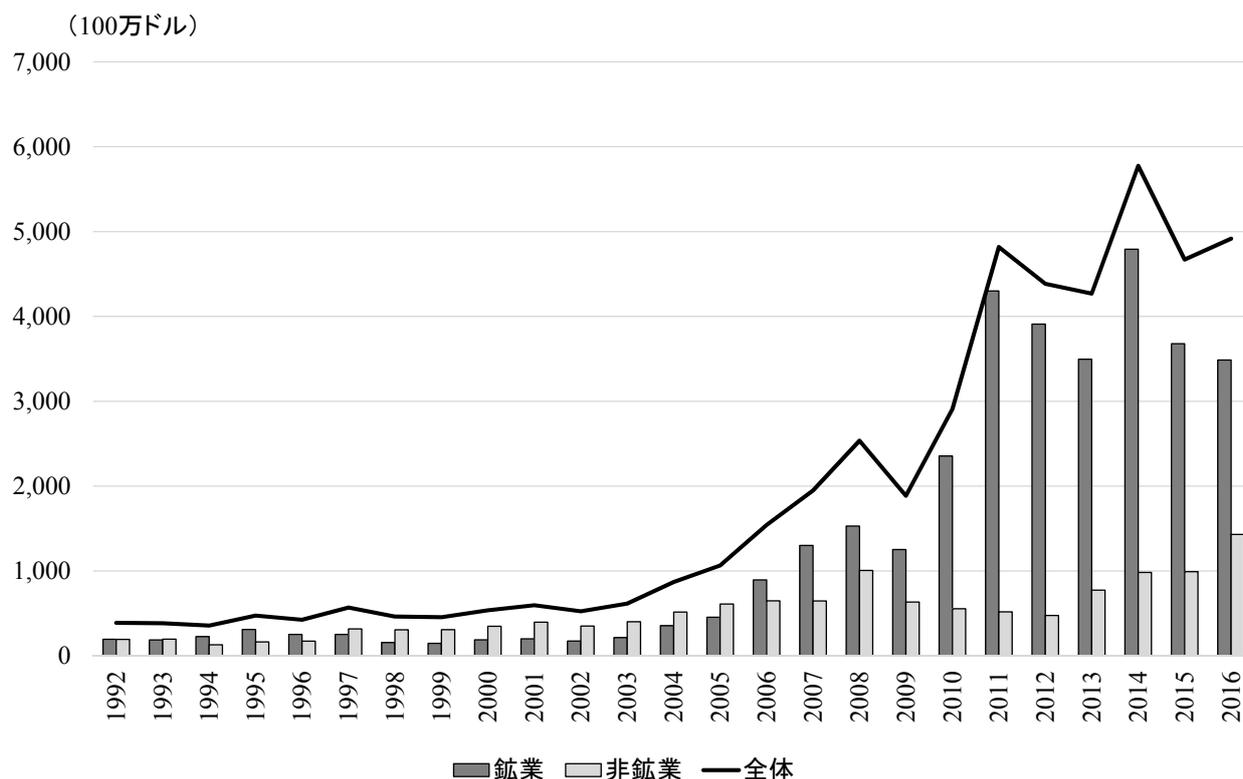
実質GDPの動向



GDPと鉱工業生産高に占める鉱業部門の割合



モンゴルの輸出構造(1992～2016年)



4. 北東アジア経済協力と将来的な潜在力

- モンゴルはすべての北東アジア諸国と二国間協力関係を構築している。日本とはEPA締結済みであり、韓国とは検討中。
- 鉱物資源のほかにも、モンゴルの農業(特に畜産業)は、北東アジア地域の食品・軽工業向けに、肉、乳、カシミヤ、皮革などの原料を提供できる可能性がある。
 - ただし、鉱物資源と異なり、家畜由来の原料は付加価値が小さく、遠距離市場で競争力を持たない。
 - そのため、これら原料の処理・加工能力を再生・発展させる必要がある。
- 交通インフラ(鉄道・道路)整備は、北東アジア地域の経済交流拡大や経済統合に不可欠。
 - モンゴルは、アジアと欧州を陸上・航空で結ぶ最短経路を提供可能。
- モンゴルには、太陽光・風力エネルギーの巨大潜在力がある。
 - 提案されている様々な北東アジア送電網に対し、再生可能エネルギーを提供可能
- 地域内での多国間FTA/EPAにより、経済交流の環境が改善。

5. 終わりに

- 「モンゴルの2030年までの持続可能な発展ビジョン」(2016年議会承認)
 - 2030年まで、年平均6.6%の成長
 - 一人当たりGDPが1万7500ドルの高位中所得国へ
 - 輸出に占める製造業製品比率を50%へ(2014年は17%)
- 鉱業への過度な依存と、その海外市場の変動に対する脆弱性は、国の管理能力を超え、経済成長を持続不可能なものにした。
- モンゴルは、経済基盤と輸出市場を多様化しなければならない。
- 北東アジア地域の様々な協カイニシアチブやプロジェクトへの積極的な参加による刺激が重要となろう。